十二源氏袖鏡　二

特別
へ12
5091
2

源氏袖鏡第二

並　うつせミ

同　夕かほ

三　わかむらさき

へ12
5091
2

<2001-088>

源氏

并空蝉

すけまみのかく人にかたらはれきこえ給ふう
もらつきなくもおぼしめす小君にいま一段
たばかれとかたらひ給ふあるよはまてとのき
やうもなけれど人まくれちかんおもはえて
ゐかりんとおもひけりきのかみ国にくだりてあと
ちかく人すくなにおもちのやかたたがへやこ
のたよくしきにまぎれよ小君の車にのりつ
かさでまかでておはしますの夕やみはみちた

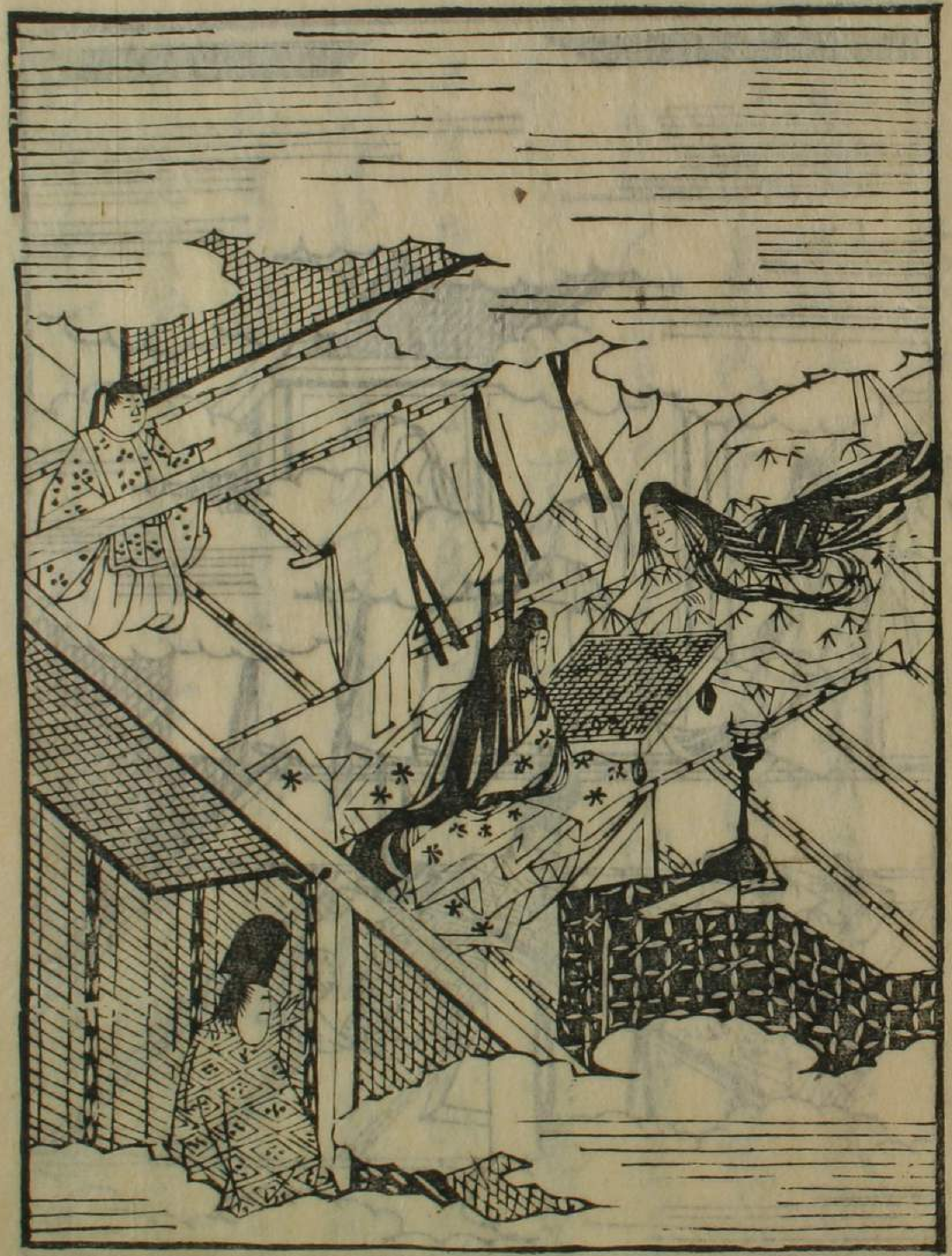
たゞし月影てくまなかりせこそのまゝも見ん
わく人ニあひたちへまかて小君わかう
しをたゝきの声ありて月へいかぬもちふ
やう こたちといふ女房 ふちの地名や こよひきのこれいのうと
御母の歌せられけるふかく琴をうちあふ
といふと源氏ゆかしくおもほしてかうしと
みせとのあひさに入くかいまみあるすゑちう
きゝしてもやみしらにそそあろ人やけころ
ふかけさる人ありとまいりめさて給へは
こゝれおやの家へかさねてあらぬわかあん

けふまきて琴らつきはうやうよちるすとも様
ひ逢さる海して物まれきゝなちられかも
うあるふあん人とみる事つきやそくるを
といふうひきうくしあり今一人いんなうしき
にくおすくら國ちろまきうきそ物のひとへよ君
のたく海乃こてひきゆひさるかともへあてふ
すらしけるうそくなるもてなし也ちろくけふ
けふとおくて琴らつきもへつき物あさ
やうたかくこのきうわきのかゝうとまゝつく
様ちけるふまくみ山居うちまてきち

さすかにかくれけれはかうたけは今ひとりは将
すへやうこは地よしれあつめけまうりのかうと
おかなきと志けめくいへもいくかゝれいまは
なりきこのところくいそくとをよくいをか
うかてこ紙たるさみえようとかくれさ後嫁よ
のゆきるもたとしるゆうこ初めのよ
此中の推きゝいらく川た八右ハ九川中ハ十六
まつく三千三あると云やいよのまけつむまめ
すれた縁あるや何くうちそく帰りつ一
あるよみさか空蝉ともなとめとし巻は新編

の萩と云り人なれか小君源氏をこき丁の間へ
みちひきつゝたり屋にをつ帰るさまに招へとも
けそれたをきなひやうたるしもいとさうかり
うつきなんにそく心つよくかのをまさけてかん
述たん九根のうち入りかる招よせんかなくてうへ
まことて帰りかこうちき紙はぬきすてゝた
むまへたりわときてまへかねうへ行る物をと
ねさてたひくれ過そう川せこに乃律く
ゆあまのんと源氏入招くひとかかりなるを
空蝉とんえてうへなきあるをなりやり招

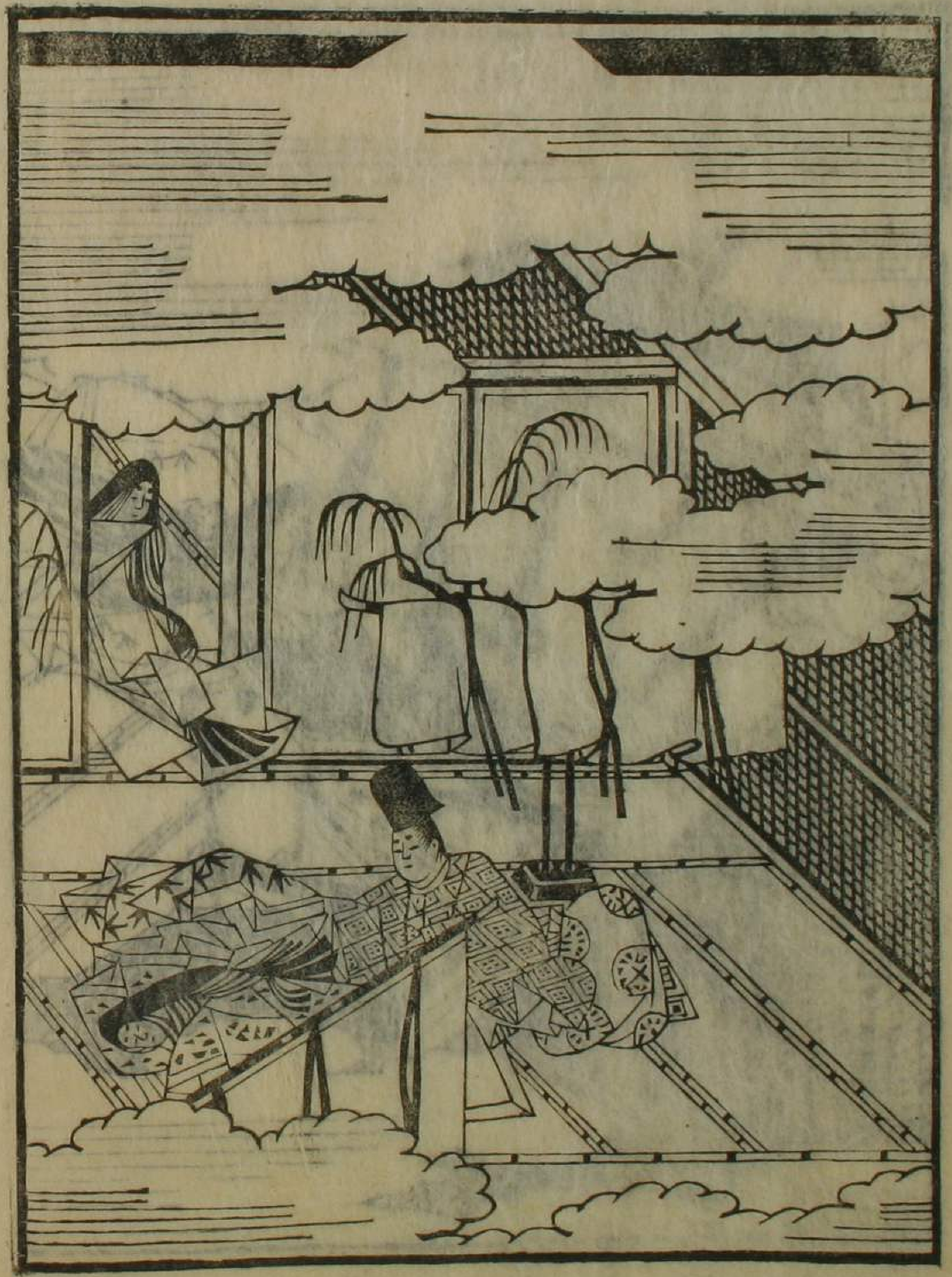
へたてし思ひもものくしくいまさらに
いまさらにとほくよくねふりたる あやしくおほしめくらしやうく見あら
けねくあるぬ人なれとねくおほしめくらし大
ちかうすゝしけむとてめハ何んもなくあさ御し
とハおほひなかりらんめつらき事もなかしうちそけ
たるさまけくしくかうしひき上て
く出たまふとてかの人のぬきおきつるこうち
きをとりて御なほしの下にかくし
小君は何さまにおもふらんの御ことのみ
あハくおほしたまひく御すゝりめし
て御よそひのやうに 源氏
うつせみの身をかへてけるこのもとに猶
人からのなつかしきかな かのうつせみハいとかな
しく人香にしみたるをちかくならしく
見ぬ給つゝ小君ハかしこに行たれハあね君
いみしくあはめ給つゝ御ふところより
せたまふ かの御たゝうかみをとり出たれハ
まとひて見るにかなしくなきぬ
もいと思ひみたれて此かたはらにかきつくる
よ女 うつせみのはにおくつゆ也



うつせみの羽におく露のこがくれてしの
び〱にぬるゝ袖かなとかきつけてを
いせおのあまのしほなれてやなとおも
ふすゞか山伊勢をのあまのす
て衣しほなれたりと人やみるらむ

並 夕顔

六条わたりの御忍ひありきは源氏の御
伯父春宮にそなはれ給ひし御息所ひめ
宮一人もちたまひて十九にて御
ひとりすみにすましけるを六条のみやす所
と申けるは源氏志のひにかよひ給ひける
所をそりそのついてに五条わたりな源氏御
めのと大弐とてこれみつか母なりけるかわつ
らひてあまになりけるをたつねておはしける
たりけれ時なりに五条わたりは御車



なそくむつかしけなる小家ともこのもかのもみゆる
を見わたし給ふに このかみそ かの面や 門前風にさそはれ乃
このもかれもまよかけハあまたと君かみかけに滴を
うけハあやしかきつなる家よひろきといふもの
あやしくうちよろほひしすくれもしろくすこし
をなかにおしきひさしつきのまへにけあまた
見えてのさくむつかしうぬきまみの海
をいつこさしてとおほしなせハ玉のうてなも
おなしきや門前老年ハいつこかさしてま
かなんのことくとそ宿ときこえさせ給ひけ

河柳よ 板きそえかりに くゐかゝり いとあをやかなるかつらの心
ちよけにはひかゝれるにしろき花そおのれひ
とりゑみのまゆひらきたりをちかた人に物
申とくちすさみ給ふをみすいしんうけ給はりて
このしろくさけるをなん夕かほと申侍る
名ハ人めきてかくあやしき垣ねにのみさき侍る
ときこゆまことにくちおしの花のちきりやひと
枝折てまいれとの給へハ遣り戸口に黄
なるすゝしのひとへ袴なかやかにきなしたる
ハ出きてうちまねくしろきあふきのいたうこ

かしこをはいさんにもせく　いつこしかハ
たさねりや
枝もなきけたる花なかりきにおきてまいる
せよといふ源氏ハ法師とのゝしりて此柚のかり
あわてさわぎぬ王の遣りとありけり守「世中よさる
ぬ王のれのなくも風ちるよしといのる人乃子孫めぐ
出すふとて雅くんにしたくめしてまつるあふ
きはらんはれハ人にまなりしうめくなるし
かうに女の手ふく
んわくにられりとそ見る白露氏ひかりあへ
かうみなかれつるとりきさりさいの跡よゆへに

て見ぬふくきこしかるもかくうるをおかさ源
しそはかうさいもをもうぬはんなかるれ法師し
ハ法たるうみよあかぬさ源ふ去之給て
一
よわてうそれりをもこめたつれなかりく
ミつる花の夕作をつりみをいはんしてつうハ
をそのちこれさハにけとなりの歌あるしと
とらせ給へしやうめいのまけなりものゝ歌あり
給うわたくしハ升中へ海うかて女とち交つく
人なときかまひ給ふ中けやうめいのまけた源
氏三ケの大事此をこ一とそりともみち惟光

にほひはみを花へくりしく見えさかてやし
を夕かれ此宿の中垣乃すきまみと申也猶かく
かよひそめ給女乃さ後あさましきまてあへなく
小屋にうつれる給ものしうりさわてそゝろく
なきハあらぬ人のたくひうけにたとやりなき
とあはれに見えまふ大殿の姫君六条のみやす
所なとへもうれしくよなかて夜すから人に御心
とまり給八月十五夜もけやとにとまり給り
六条のみやす所の御かたに中ねの君といふ
女房ありし時源氏みやす所の御かたへ

くれ給あしたまかりのさへ御をくりに中ね
言より八月まうりゆふに志をん色のおりに
あひたるもあさやかにひきゆひたるこしつき
たをやかにまみゆたに見えけり給て見そめの後
のかうらんにしはしひきすへ給て源氏
さく花にうつるてふ名ハつゝめともおりてすき
うきけさの朝かほとよまれきとて手給
さらへ給へる中将のおりにいとなれく
朝霧のはれまもまたぬけしきにて花
に心とめぬとそうつるとみやす所の御すり

やかて源氏へありておほせいたしゆくかの
夕かほのやとに見え給ひし人をわすれかたくおほし
すみ給ふ八月十五夜あかつきちかくなりにけるに
となりの家々あやしきしつのをのこゑすきおほえ
おの物からきこえくるとなりのこゑもなを
ねさめかちなるにからうすの音とまして何のひゝき
きとは中々にきゝ給ひてもあまりかしかましと思ほ
さるゝにしろたへのきぬうつおともあはれにきこえ
けれはこのちかき所に心やすくてあかさんとて
のこいひくるまにめして右近をもつれてはゐ

ゐ御車まて出給ふあけゆくそらもおかしきにおとろかれ
たちさらぬおきなのこゑにてぬかつくそや　らいはい のすせや　みたけさうし
しうやあらんともたゆらいかうしとそおほせ
なるかまへて後の世のことはいのりをさむる
あはれなる程に源氏
うはそくかおこなふみちをしるへにてこん世も
ふかきちきりたかふな　夕かほ女
さきの世のちきりしらるゝ身のうさにゆく
すゑかねてたのみかたさよ　かくしての院とも
なへ此女君をいさなひておはします　なにかし

さて何かしの院とハ六条かはらの院とも云
大臣の跡なりいみしくあれまさりて物の
おそろしきわたりなり女ハいと物おそろしと思
ひけり物寄も有けれと源氏
いかにへもくやハ人のまとひもんわかまさる
ぬるのゝめれみち女君
山乃端の心もしらて行月ハうはのそら
にてかけやたえなんかゝらんに御車ひきかけ
てたれよりまへにをりて立給ひつ折給てハよ
ろつちきけて此院の心しけしるとの

みさ夜ひさしくて今そ源氏とられ給ふ
八月十六日たつ源氏
夕露にひもとく花は玉ほこのたよりに
みえしえにこそありけれ宮のおかやいふと
なさまへをしあめかたこせて母
ひかりありとみし夕かほのうハ露ハたそか
れ時のそらめなりけりかうしらくおそれ
てはよのあけぬまつてせてかなてかしくから
とけておさき中門と契約よりかのすゝ門前
ちかきの律中門をたらしぬとも君とゝる

ねしのつきめやとよひもこしめす程に源
むすめし御ところにまゐる小将たちここにい
とおりしも頭の女めのくいふやうなかれいと
めくらしと思ひきこゆるをハ女子もおほさ
ておとく語なる人をめておもしろことも
て此後そもたる人をうきおこさんとも物よ
おうつす人らして人あけまゐ給このあふ
らもきこしにえりもつくおほしめして人
をめさんとて給よ城さく小山ひこのちふ
衛もうるきし此女君物よおそかれていろ海

ふきんとあせもしとゝになかれけりうこんせ
めしたしける女房ことこもおなし給ふしさ
ゑひされたる御前てたる太刀（たち）よ給はぬき
給て志くめさしとて御身つくろわしの
妻たよ出給くめきは給ふ人してお（さ）
うりしおくまてまつるいしんもはら
うちしくあしきこハつかれ人あまれなる
能まてうちさけてさぬらふ御なハとてうつ
入くつハきぬり給へき女君いまも夢く
まよくとの道の乃むすきせいとかよあくて

ひるもよる殿のこ見つる袖をとおほせをません
ろうしからうして志うくまいりてうらうし法
蔵に見へし女面けは見えて御とうせ恕
むかし袖ろうもふしきうくら事はさけとお
さ海しまれともえい人ふるなわめられと
おほせ流れ仏まふいは法多れけへも志られ給
りまそれとい紀もちておら君やいき御給
へ歌はいみしきめふみをあひそとの給へと
ひえまてきけまた宮まひもけうとく成
ぬ犬うちれ色さくらのこの井中もぬこ

も今夜法代まれもゆつきくしくあし
て火あやうしといふ夜なふもなかめらん
とおほゆるは風おろくしく吹ておはさの
おふつはかのうたよて親まり屏風のうえ
こうしこく海くしきは袖乃あしをと忍し
起しとしてうしろうら添ゆらもを南殿
の鬼のなふりしのおとゝをおひやりきん
ためしをおもいてさわともむすしく放
まてしよりの志おろくしとうこん
りなくをせいしまふむりし貞信公夜は入

て南殿をとほりて御殿の石つきをとう
へうちをきたり鬼ハ毛のあるまれつめの刀
のごとく也君と御ほしくゆるさすハわら
はんとて太刀をぬき鬼へむかひとうの角
へ遠なかると共に大続にある惟光めしに
はらひされとおりかさくぬものにて
かしこ川あら鉢衣のあくふ久しき子と
せどもく次也ちり始引合萬つまハちを
き我あるを人ちしてまり川ハ滝ともに久しから
なか松のひさき木かくきこて霞しき

あらためりしまなきさろもかゝろうハこれ
うやとうかあつめきこくおそろしきふなと
めくむられきやうかをハとりつろそとくやしさ
もやらんとるし鳥乃数ちるるにきこゆ
く殿うしてこゝきこ川まゐれりめしいまて
ちうはいとおやしきとの御代あさ海しやし
いかにもあまりてよんくろゝみのすかた眼
あまりもたてさせんとてあまりや抽せよとい
しいとの後こゝをこ川の宛のちしやまなり此人まいりつる御は
いさ我のへ始てくわしきことも御ほしまいり

なき給ふありさまをあはれならうたしや
見えてまつそてこれこそ其の道もらくとうき
ねおしやりハ給ふ山への有わきめつらしかる
御車よもかるをとて給くも人なかりこと
かくきんかハふるる人海るへきと申あさせて
東山よりしはすれのあまの河原にて
給ふ恋へハ道をまんと申引寄こかれハ
わかるるとも志らか川のこつハらひまておいよ
冬るるさうハ源氏ハ御るまて二条の院
へおりませとて此人を車よのせんとて志

さくらもえ出見えうハむしろなとしくてみ
たるかかへハこれあくめもられくおほさるう
こんと車うハそへく惟光ハくてわきあけ
なとして指しけとりとかく源氏ハ二条
の院よおたしましつさてむ月さくへお伴
あにあるるみ道ハなきのりそひていう
さかつんいきおもん時つしとやおもりんと
ん海ひの中もおかさるかくいふ五十七日
れあし女なわまられよえんうし山へ御る
にくおそしれとのし大どうそむけて

てあはしくてらあつうちぬしころまかり
われすみの法そ乃かきゆかわらなといのるすん
むりしれ契かよりと出しくて我よし一族
おりときりせまへとたち紀こり達す左右を
いいさ二条院へとのおへといとけすくよりる
時なるれさてまつりさわし人をもをられて河
くへり海のゆらん事を思まへりまたくらいてう
せちんとかせせいせ世中の別といふ物のかなし
かるねいなきわさ也さいのなめて家をさみ
めとのさまいくとり乃事いは神せん法

まれもかんりちりて海の底とて法ミの
流にくはるよりわすりおちていみしく海とい
おふこれ河んまかいして清水の観音を
頼んしわれ心をもかけを念し頼いく
わりくたるけらせて二条院に渡りいて
様いくなやとあまり法しなきくするきりほ
ともかうときやうまいりまへとあめれしさ
のちきまてやうくなり月九日あまりよ
そをこるか頼へく頼なきりちまなめ頼て源氏
たし人の姻とされとなり出さるゆかへ

のちにもむつましきかれなを御ゆるしよせく
つれなきをちらく給ひてつまハはらひちらし
給ふくもいろなる人のむすめとゝくらしく
さいまへ三位の中将とやせし人の子や
頭の中将なりしをやうけんみてまいらすを
こゝろふかくみやせはかゝる每夜の思ひさめ
にたくしことかわしく人よと思ひしあハ
するよ一しかあさりきよりてそのおさ
なき人をいひやうもかこつけて出まえん
させよと存くそくしまふ此女君返よ思ふ

ちなみ夕かけとし九十九夜をまちあまを
あふまで此かのうけをとけて此文をかへ
とそねをもなをかれとてそ御つかよいの
はかりハ忘いらるくとやまわめつらしくて
御まもりかるくなるかにせんし
うけをみの世にうき物と思ひけしを書き
よの思ふよかくる命よけうつせらるゝ時るの
ものりして今宵と中もまかのむすめ
まいむらはさかさり每夜一夜もあやまの時
ゆらんしたる後ハ此文をかたつらえし給ひ

ねをおほしそへ多くやうすら萩につけく
ちのみにも形見の萩とむすびおきし家
のかたは何よりけまし女は心うしとおもひ
きこゆるを法師しいふのちれむすめ
ほのめかし風につけくもあらて萩乃花は
ちり殘りしをおりまつけふも出へまけ
女を形見の萩といふ夕顔の四十九日也
えの山法花堂にて惟光の兄のあしや
まうけ給ひてたうとくし給へり御経り
をくりなましやうそく此中にた夕顔のこ

とゝのへさせて源氏
なくなくもけふはわかゆふ下ひもをいつれの
世にかとけてみるへき伊予介国へくたるに
女房もくたるとて源氏よりたむけ
心ことにくしあふきなとおほくつかはされ
きてやりうつせみのころもへは志のひて御文あり
かの人も給ひしものをこらしさをいまそ
えし給ふ文なとのきやうなくつかはされ源
あふまくの物ことたらとかへし猶ふ泣
すゝ袖乃くちふかなれぬしさ蝉

せミの林もさらくなる夜寐久をき
みても孫ハなれけりきゝ名を立目たゝ
けるとしてくうち河面なる宅に仲ち入下
ふともタうかのなりさばもなあ給て源氏
立ようもきふわらくもやさしよ行る
しらぬ秋の萱なかいつも人しれぬ此御心
ハくらしりかなりとお佗しきかあんり

三 若紫

源氏ハまつハやミをわつらひ給て色ゝなるく
さはあらん中やうか山乃なにかし寺と云
所なり尾をて海しまひてもろさり里給
しておこなひ給ふハいうそ御なるをかくそ
こゝろさせ給へと中ゝめしふつり
されたる花ゆゑまかてもろの戸もえぞ
なぜぬよしゃられハ思ひくかたちへおり
また山ふかく入まておきまりまに宿おん
たくさまかもおしく三月つこもり

なまなり京の花ハこれにかハれるを山乃
桜ハまださかりにていみじくおもしろく
寺のさ海もいとあはれ也嵐たえて木ぬき
岩ね井まつ寺ハねこれの紹
てれうちまかわさるへき流るりてまた
よそまつるにその日ハおこう世紹そと秋
そうわハさてもまた結ひく数ありたうちれ
ともかくて出させまへとおもひ世ハともち
おふつましくにくき人乃山に立あく京の
そ残見んやかて紹へたりけるにかをみゆるて

四方の木ぎ清うこえてとおしまをわすれ
かたと絵にかけれ心ちはなすさめあるん
とて津よりものへくみし乃国の名所とも又
あしの山たなみりしれさけなといろくよみし
里まてくわを時に海のあしかりう
より何れいてりみきくまいなけまと兵海
のおりてを見まてすかとゆかひるすう所に
まとか いつゆき くるまを 津かくるかの乃むかのさ紀
れうこ志ありちれむそめりつきてるすまき
ちもよきさ海あと練りかきこれかく

やさしかりし也又たくひなかりしの僧都とおもひ
何かしの寺おはします也名をさし時代を
わらはさしとめやうようつゝりなんと思ひせつ
らおかの下に小柴垣ゆへまさ所なよし
すまてらしあるをそもねしかるそ此僧都
のこともせこもわかる坊なりける源氏これなる
いろは佐まそ思ひてかいまみ給へハゆへく
しきわか君又おもはれくしき女房かそ
あまたありたきす紀子とも出入くあそふ
中にすくれたる姫君のかほハあかきを

ひろけさんやうよゆらくさしていちけなく
かいやうらむさいつきかんさしま内のうち
はふりたるき後すらうらけよおひさんゆ
うしくミゆる人き後なかけうちなつかの
かやく日乃家ようく似なる物かると後も
盛給まも涙そおつるほとをあくまかみ
てたてゝかすゝめれ子我あせこの下よこあかり
しをいねきかにうしろとしいとくちおしと
思ひかゝもなくしそ見ん何られといゝて立
てゆくハ此ひめ君のめのとなる人へし尼君

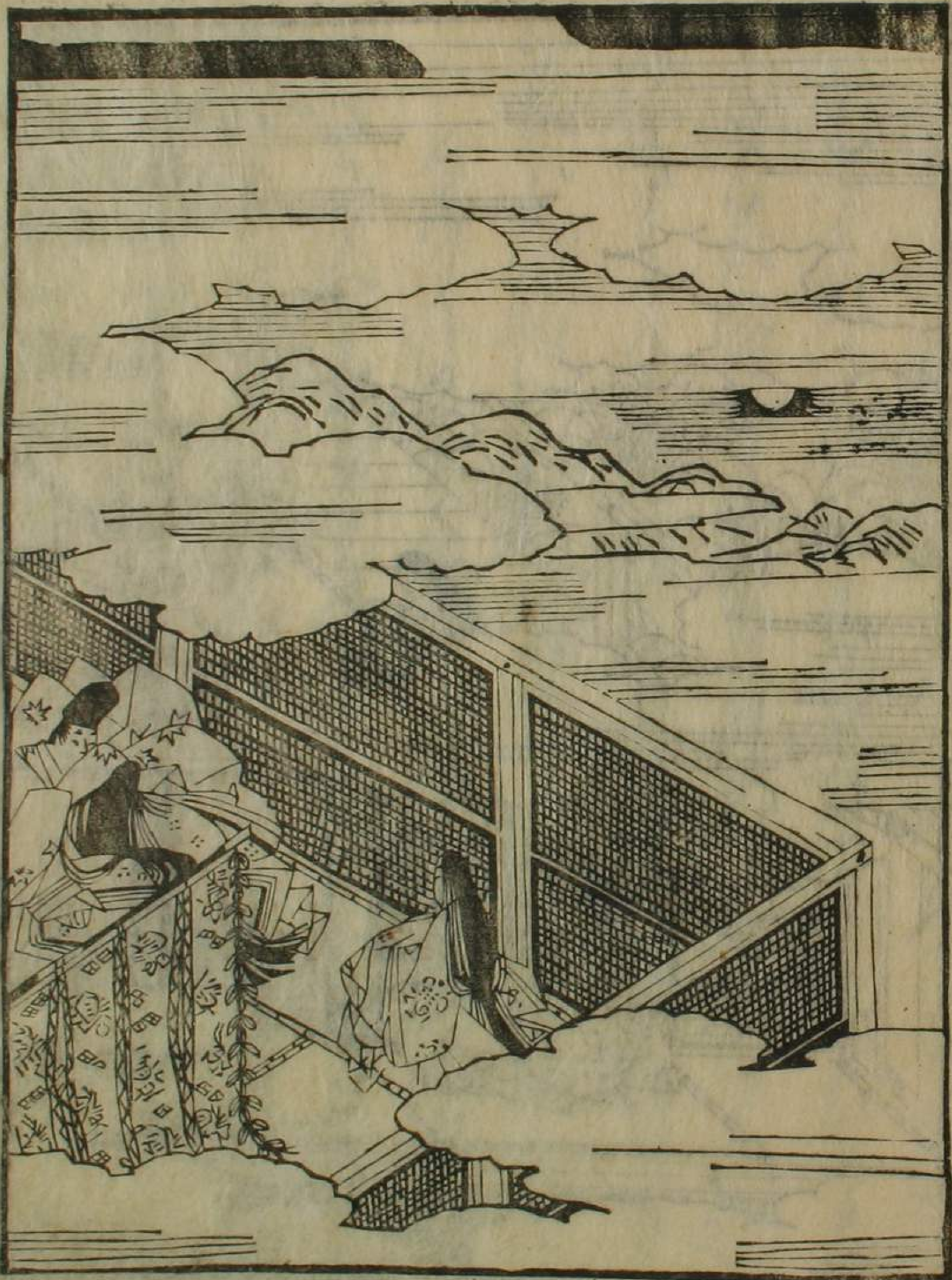
いたやましきにほくあうそくは縫うちときき
てよみわたりこちやとのさまへハおきされ者
人もつい形よりかゝらはさすてをの里
りまふおもとも忘ぬとハ何ともおほさて
すゝきんの子忘ひまふよとてあま君
おひたゝんありかもしらぬ若草をおく
らす露そきえんそらなきおもしくねうろ
礼とふ
初草のおひ行すゑも忘ぬまにいか
でか露乃きえんとすむとらふき海ともを

見まふよそうちよおもいほかかくてこの院
都の坊へ源氏を入まいらせてまことにあま君
の后さくろまもちゝうけ住ハいやうぬとさこ
しひきあけてあふきはやしおひて申
よろ人よ源氏
初草の若葉のうへを見つるよりたひね
の袖もつゆそかはかぬ君
枕ゆふこよひはかりの露けさをみ山乃
苔(こけ)よくらへさらなん清花三昧おこなふ寺
滝(たき)の音にひゞきあひける源氏

吹まよふみやまおろしに夢さめてなミだ
もよほす瀧のおとかな　僧都
さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心
ハさわぎやハする　耳なれ侍りにけりや　僧都ハ涙ぐみ給
谷のそこまでかくちかひまして御うたよミけれバ
光源氏
宮人に行てかたらん山桜風よりさきに
来ても見るべく　僧都
うどんげの花まちえたる心ちしてミ山
桜にめこそうつらね　聖ハうちなきけれバかく
おく山乃松のとぼそをまれにあけてまだ見
ぬ花の顔を見るかな　聖ハ涙ながしつゝ
とて独こをたてまつる　僧都ハしやうとく
太子のくだらよりえ給へりけるこんがうじ
のずゞの玉のさうぞくしたる箱ハかの国より
入たる箱のからめいたるをすきたる袋に
入て五えうの枝に付て又紺るりのつぼに薬
入て藤桜につけて御おくり物たてまつる
ところにつけたる御おくりものさゝぐ　源氏
夕まぐれほのかに花乃色をみてけさハ

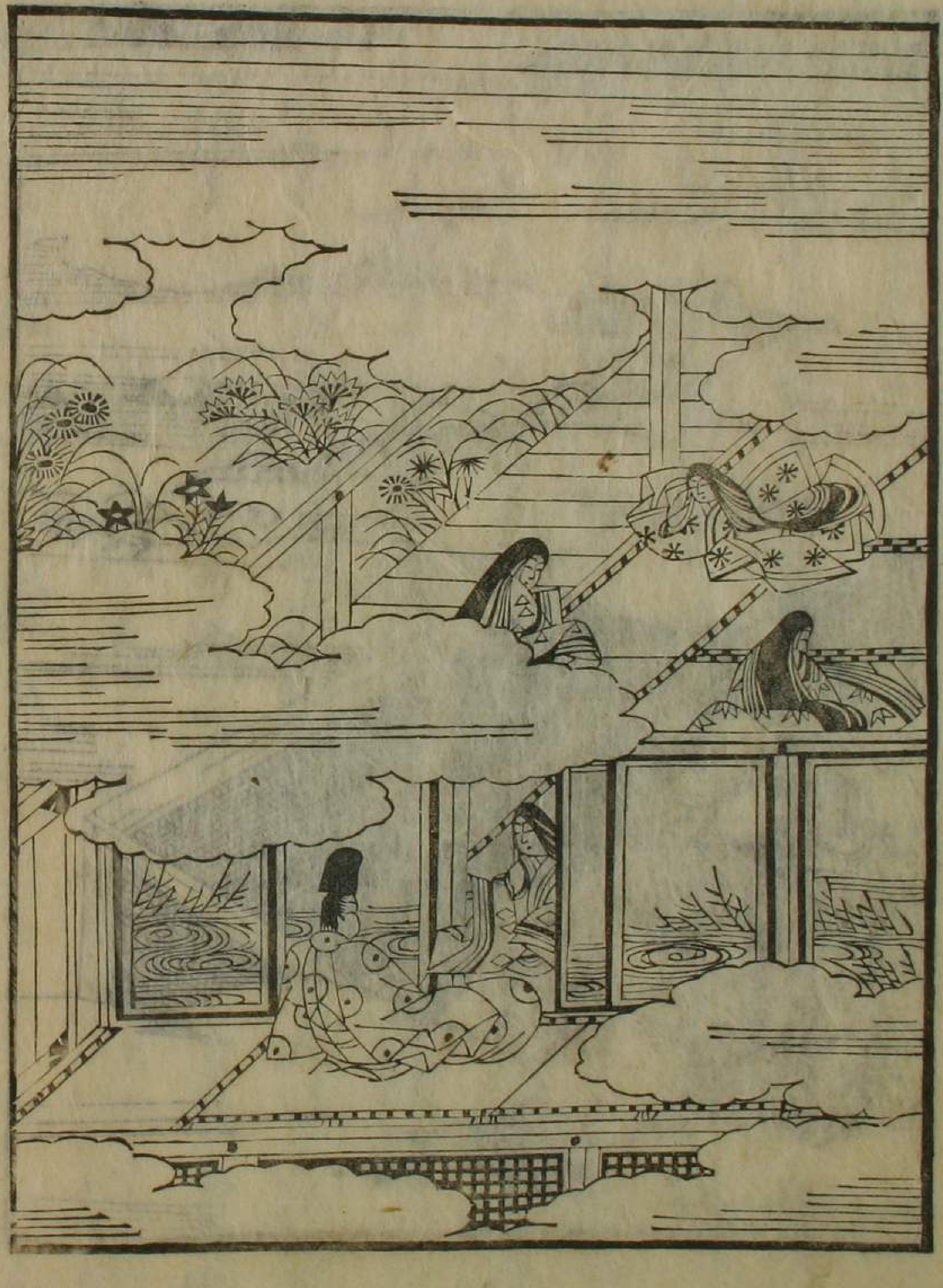
八庵のたちそまつなる御庵尼公
浪とよや花のあたりハ立うきとうすむら
雲乃むら紀をもえん京のわたむらひの上
筆紙硯上人おもふまゝりなつかしけれ
の山川まくさるへき梅も絵かきみしき
花の木にもうりも風をさふまし事を
人こハらち新しかて岩くれの苔むしよ
すみなれおちくるれの宮もへたとゆへき
瀧のおとゝ以の中ねやこゝろあわけ哉
笛も吹出く吹ならし信紀相冬を月門る

源氏へもてまゐりてわけひとつあそむして山
の名をもおもしろく侍らんと紀をこし
ひきなをして筆ち給ハ便紀もちなき給て
大川のふところかきわけ世よなれしむまれ給
ひくんかりわかの流きさ海てとなつまゝ出
きとてめをとし乃こひあふ此相さ紀しき人もを
枝ハむいふ紙流くれとくも源氏の中ねをと
名つけくいよき夜をきせてかしつき給なり
はく宮へわたりても信文あわ源氏
面まけハ紙もちなれをとふきくて心乃



うさわとめてこうしと御意あそはされ
おしやておのへの桜ちらぬまは心やめ
に ゐろなとのたまふさ二三月ありてこれらを
はうし給りゆくての事はなきとさわとふ
ひきこてしにかうちくさせまつるよと宣給
もかしこまりて給け姫君の母ハ従顧の為
めいまり為文ハ藤つほの兄先せんさいの式
部卿宮文此うむをめ也さうかよりて薮堂の
為あハあれたまく給まつる也ゆくてとハたちかや
かうきへハわきとまり
為文ハこ海うふく源氏

あさか山あさくも人をおもはぬになと山の井
のかけはなるらん　御山の尼君よりの返事に
まことになにはをふつけ給ぬとあるハ此はかなし
源氏よりこそそのさうらうき見えまゐらせきと
の給ハ此そのよく一字つくしきも　尼しあま君
くみそめてくやしと申し山乃井のあさ
きなからやかけをみるへきいまうおさきれき
きハうをひきぬかねもとりけ也此頃ハ大君のつかひ
の女房とやこ給ひくゆるて御里よおりしくり
源氏ハゆやうのひまにふときあくれまほしく



此心ちして此文をは侍る女房王命
婦といふをせめありきまかいくたてりん
まかなくて見えそまつり給ふかとさへうつしも
おほし給ふをくらぶ山にやとりもとらまほしか
しけれの川音　こよひふくる嵐の山に
宿もかはるへきにやぬ夢やさめぬと源氏
みても又あふ夜まれなる夢のうちに
やかてまきるゝ我身ともかなとむせかへり給
もせんかたなくいうしくて夜ふかく
世かたりに人やつたへんたくひなくうき身

をさめぬ夢になしてもたえかたけなる給さ夜
なつかしく我かうけるせいはなとえたなの宮
あまり所さたまりて給はぬとそおそていかゝ
めしくもひきこえておほかやうのまきれよ山
宮人はひさしくなきつれ給はぬとうえの尼
上京乃御家へ渡給ひつゝ惟光申せハ
源氏立よりまいりたまへやいさ消さりて尼
君は御たいめんなし姫君はちいさくおはしまさん
しの君しうおかしまれ見えかたのくれたりや
ましきなくさみ給へとのたまふし給ふ

にきうかうつりけらく此文つかへり源氏
いはけなきたつの一こゑきゝしより芦
まになつむ舟そえならぬ　かつむらさきはおまへの身のうへやよそ人ゝ
とくのつまもらひまゐらせて後つかの君
歌よくありける人を撰けく
手につみていつしかもみむむらさきの根
にかよひける野への若草の心にかよふ
もひめ君とも紫と名付たりける
むらさきの一もとゆへにむさし野の草ハみなから
あはれとそみる　此歌ハ古今集の歌也　後つけの御
めいられハ桜かりのむらさきにてあま君
九月になれハなりあはれなるつひさまに
きく後源氏
おしまれ浦にろめへてまもこいそち
なかり御後はいゆるしか少納言君　むらさきのめのとや
よろ後の心も尽て　わかれかしはたまも
なひき独うきつろ風吹あれなまめしき
夜源氏むらさきの内まとまて通ひて出けて
かへしは浪のく夜ふかきあかつきなりける
夜ま姫君ハつまの家あり門をたたく女世ゆに

まゆつきはいとあはれにて二人そりける花
たまふ　源氏
朝かほを夢に見給ひしのちゆき
色のかはいもの中のうらみわかれしあはれなる
侍へをのそして女
立ともわ霧の内なき此色なくは昔の
さこしはなかしもなし袖行月よたかて
かゝりて御まつる御車にうちのせてかくもる
さ給ひを御まとそかなかり御かのとも雲乃
君もかあへ給うかひかあつ御くひいふ

忘れぬと御心に思へ給こと我あかりかくるゝ
つけ給ふ源氏
頭ハ今日を何つれとそ言ふむすし特のき
見ゆるなる夢の中なを君もなき給へとの
給へそおきあけまはきしくるてなきそ給ふ
姫君
かはゆへまゆへをしてゆハ給をつきかいふ
御夢のゆりたりんしてもら夕ハ御かとも
小そそてきそうしゆる